

# 經濟論叢

第九十四卷 第五號

## 豊崎 稔教授記念號

---

献 辭 .....	堀 江 英 一	
帝国大学特別会計と演習林 .....	鳥 恭 彦	1
独占資本家層再編の一紐帯 .....	大 橋 隆 憲	20
レーニン『帝国主義』の 段階規定について .....	吉 村 達 次	37
添田プランと高橋意見書 .....	小 野 一 一 郎	56
日本の合織産業における 若干の問題点について .....	中 村 忠 一	74
公共料金問題と独立採算制 .....	寺 尾 晃 洋	91
現代交通政策の基本動向 .....	中 西 健 一	112

豊崎 稔 教授略歴・著作目録

---

昭和三十九年十一月

京 都 大 学 經 濟 學 會

# レーニン『帝國主義』論の段階規定について

吉 村 達 次

## 一 帝國主義

レーニンは、第一次大戦のさ中に、「社会排外主義」のかたちをとった日和見主義と帝國主義との関連——当時「社会主義の根本問題」と彼がみなしたところの問題——を追求した『帝國主義と社会主義の分裂』という論文において、帝國主義に関する「できるだけ正確で完全な定義」をつぎのように述べている。すなわち、まず「帝國主義とは、資本主義の特殊な歴史的段階」であるという一般的规定をあたえたのちに、その特殊性として、第一に「独占資本主義」であること、第二に「寄生的なまたは腐敗しつつある資本主義」であること、第三に「死滅しつつある資本主義」であることの三つをあげている。そして、これら三つの特徴のうち、第一のもの、帝國主義の経済的基礎をなす独占資本主義を、「根本的特徴」・「その本質」とみなし、ついで独占資本主義の「五つの主要な形態」を列挙している。これは、いうまでもなく、彼の著書『帝國主義』論<sup>(註)</sup>において、帝國主義の基本的な純経済的定義としてあたえられたものと同じである。

(註) レーニン『資本主義の最高の段階としての帝國主義』を指す。この書における帝國主義に関する純経済的定義は次のようである。「もし、

帝國主義のできるだけ簡単な定義を与えなければならぬとしたら帝國主義とは資本主義の独占的段階である、というべきであろう。(一)生産と

資本の集積。これが高度の發展段階に達して經濟生活で決定的な役割を演じている独占体をつくりだすまでになつたこと。(二)銀行資本が産業資本と融合し、この「金融資本」を基礎として金融寡頭制がつくりだされたこと。(三)商品輸出とは區別される資本輸出が、とくに重要な意義を獲得していること。列強資本家の國際的独占団体が形成されて世界を分割していること、(四)資本主義的最強國による地球の領土的分割が完了していること。帝國主義とは独占体と金融資本との支配が成立して資本の輸出が顯著な重要性を獲得し、國際トラストによる世界の分割がはじまり、最強の資本主義諸國によるいさゝいの領土の分割が完了した、そういう發展段階の資本主義である。(第七章)

他の二つの特殊性は、この第一の特殊性、すなわち独占資本主義という經濟的本質から直接派生するものであり、全体として、資本主義の特殊段階としての帝國主義の歴史的地位を明らかにしている。

この段階規定が、当時の「社會主義の根本問題」であつた日和見主義、とりわけカウツキー主義との理論闘争において決定的意義をもつたことは、その著『帝國主義』論を読めば明らかであるが、今日においても、さまざまなかたちで、資本主義世界における「帝國主義の終焉」がはやしたてられるなかで、いよいよその意義をたかめている。本稿では、これらの三つの特殊性によって規定される段階規定と、資本主義の運動法則の歴史的特徴について、レーニンのカウツキー批判を中心に若干の点をのべてみたい。

## 二

(一)レーニンは、『帝國主義』論において、さきあげた帝國主義の純經濟的な五つの指標について、詳細に分析したのちに、「資本主義の特殊の段階としての帝國主義」を綜括し、つぎのようにのべている。(『帝國主義』第七章)

「いまやわれわれは、帝國主義について右に述べたことを概括し、総括してみなければならぬ。帝國主義は、資本主義一般の基本的諸特質の發展およびその直接の継統として生じた。だが、資本主義が資本主義的帝國主義に

なつたのは、やつとその一定の、きわめて高度の發展段階においてであつて、資本主義のいくつかの基本的特質がその対立物に転化しはじめたとき、また資本主義からより高度の社会「經濟制度への過渡期の諸特徴があらゆる方面にわたつて形づくられ、あらわになつたときのことである。この過程で經濟的に基本的なのは、資本主義的自由競争に資本主義的独占がとつてかわつたことである。自由競争は資本主義と商品生産一般の基本的特質であり、独占は自由競争の直接の対立物である。……しかも、これと同時に、独占は、自由競争から発生しながらも、自由競争を排除せず、自由競争のうえに、これとならんで存在し、そのことによつて、幾多のとくに鋭くて激しい矛盾、軋轢、紛争を生みだす。独占は、資本主義からより高度の制度への過渡である。」

すなわち、第一に、資本主義の基本的特質たる自由競争が、その發展のなかで、自己の対立物たる独占を生みだすのであつて、その意味では帝國主義は資本主義一般の基本的諸特質の發展およびその直接の継続である。第二に、自由競争にかわつて独占が資本主義の基本的特徴となるにいたつて、帝國主義段階として確立するが、同時にそれは「より高度の社会「經濟制度への過渡期の諸特徴があらゆる方面にわたつて形づくられる」ことでもある。第三に、しかし、独占は自由競争を排除するものではなく、両者相まって、一層「鋭くて激しい矛盾」を生みだす。この最後の点は注意を要する。

ついで、レーニンは、帝國主義の純經濟的特徴をあらためて概括したのちに、（上掲「註」）カウツキーの帝國主義論の批判にうつり、まず、カウツキーが帝國主義を資本主義の一特殊段階たる点をあいまいにしてゐることを批判し「帝國主義にとつて特徴的なのは、カウツキーのいうように、産業資本ではなく、金融資本であること金融資本の發展が、帝國主義政策を不可避にすることを強調してゐる。そして、金融資本による帝國主義的「併合」の特徴をつぎ

のよりのべている。

「帝國主義にとって特徴的なのは、まさに農業地域だけではなく、もっとも工業化された地域の併合をも求める志向（ベルギーに対するドイツの欲望、ローレーヌに対するフランスの欲望）である。なぜなら、第一に、地球が最後に分割されたので、再分割のさいには、どんな土地にも手を出さなければならぬからであり、第二に、帝國主義にとって、ヘゲモニーを獲得しようと努力している、すなわち、直接に自分のためではなく、むしろ相手を弱めそのヘゲモニーをくつがえすために土地を占拠しようと努力している、いくつかの強國の競争が本質的だからである。」

ここで重要なことは、帝國主義國家が農業地域だけでなく高度に發展した工業地域をも併合しうる可能性は、先進資本主義國において支配している金融資本の独占力によつてはじめてあたえられるので、かつ、それぞれの國の金融資本は相互の独占的競争——世界市場における独占的ヘゲモニー獲得のため競争——によつて、先進的工業地域をもふくめて「世界領土の再分割」——鬭争にのりださざるをえない必然性をもつということである。

レーニンは、帝國主義諸國の鬭争とその特徴を金融資本と不可分に結びつけて考察することによつて、独占的段階における資本主義世界体制の矛盾の全展開を科学的に論証する基礎をあたえたのである。

(二) ところで、資本主義の特殊段階として帝國主義の運動法則を検討するうえで重要なのは、右につづいて、レーニンが、カウツキーの「超帝國主義」論を批判して、つぎのようにいつていることである。レーニンは、カウツキーのいうように「純經濟の見地からすれば」「超帝國主義」は可能であるか、それともそれは超ナンセンスであるかと問ひ、みづからそれに答えている。

「もし純經濟的見地を「純粹」の抽象と解するならば、言いうるすべてのことは、要するに、發展は独占へむかつてすすんでおり、したがって一つの全世界的独占へむかつて、一つの全世界的トラストへむかつてすすんでいる、という命題に帰着するだろう。しかしそれは、実験室内での食料品の生産の方向へむかつて「發展がすすんでいる」というのと同じように、完全に無内容である。この意味で、超帝國主義の『理論』は、『超農業の理論』と同じ程度のナンセンスである。」

ここで、レーニンがのべている「純粹の抽象」とはどういう意味であろうか。帝國主義の純經濟的分析は、レーニンもこれをおこない、まさにその分析によって、帝國主義段階の經濟的特徴を独占資本主義と規定した。しかるに、彼は、カウツキーが「超帝國主義」論をひきだした「純經濟的見地」を、「純粹の抽象」と解した場合にのみ、カウツキーの結論が無条件的に正しいといっている。つまり、レーニンは、彼の「純經濟的見地」と、カウツキーのそれを区別し、後者はいわば「純粹の抽象」としての「純經濟的見地」だとしているわけである。そして、かかる「抽象」を「死んだ抽象」だとして、彼の「純經濟的見地」を対置して、つぎのようにいっている。

「もし二十世紀の初めにあたる歴史的、具體的時代としての金融資本の時代の、（純經濟的）諸条件についてかたるなら、（超帝國主義）という死んだ抽象（これはもっぱら、現存する諸矛盾の根底から人々の注意をそらせようとする反動的目的に役立つものである）にたいする最良の答は、この抽象に現代の世界經濟の具體的經濟的現實を対置することである。超帝國主義うんぬんというカウツキーの空虚なおしやべりは、とりわけ、金融資本の支配が世界經濟の内部の不均等性と矛盾とを弱める——実際にそれらを強めているのに——かのようにいう、根本的にまちがった、そして帝國主義の弁護者たちの水準に水をそそぐような思想を、鼓吹するものである。」

さきの文章とともにこの一節には、レーニンの『帝國主義』論の方法論的特徴がきわめて簡潔にかたられてをり、きわめて重要である。たとえば、宇野氏は、右の「純粹の抽象」を「私（宇野氏）のいう原理的規定」と解し、これに対して「現代世界經濟の具體的・經濟的現実」からひきだされるレーニンの帝國主義論の特徴は、氏のいう「段階論的規定」としてあたえられるものだといわれる。もちろん、宇野氏は、カウツキーに賛成しているわけではなく、カウツキーが「原理論」的方法でもって、本来「段階論」的に展開さるべき帝國主義論を分析したところに、「超帝國主義」という死せる抽象」をもたらす結果になったのではないかと、批判されている。しかし、かかる批判は実は、修正主義者カウツキーを批判するかのようであって、実はレーニンの方法を骨抜きにする企てにすぎない。このようなカウツキーとその「批判者」！宇野理論との實質的野合の關係は、最近わが国において流行をみた国家独占資本主義論にもみられるのであって、その關係を明らかにすることは、單なる無意味なスコラ的論議としてかたづけられるわけにはいかない。今井則義氏や井汲卓一氏による国家独占資本主義論が、本質的にはカウツキー的修正主義理論の再版であることは、今日もはや否定さるべくもないであろうが、これに対し、大内力氏は、宇野理論的方法論にもとづいて「批判」を展開しているけれども、これが国家独占資本主義論を正しい軌道にのせる所以でないことは、宇野氏のカウツキー批判におけると異るところはない。

〔註〕 宇野氏はその著『經濟政策論』二〇二頁でつぎのようにいっている。

「ここでレーニンのいう『經濟的見地を（純粹の）抽象と解するならば』というのは、恐らく私のいう原理論的規定と解してよいのではないかと思ふのであるが、そうすると方法論的に極めて興味ある重要な問題が生ずることになる。國際的關係自身をも抽象した原理論的規定からどうして（發展は独立へむかつてすすんでおりしたがって一つの世界的独占）一個の世界的トラストへむかつてすすんでいゝ、という命題）がでてくるのか、そしてへこの命題は争う余地がない。しかし……無内容である」といふことになるのかという点である。『資本論』のような原理論

の規定が如何にして國家や國際經濟を展開しうるか、この点を明確にしないことが、むしろ、カウツキーのいうような「超帝國主義」という死せる抽象」を展開せしめることにもなつたのではないであろうか。〈現代世界經濟の具体的「經濟的現実を對置されること」がこの抽象論に對する「最良の答」というレーニンの主張は、原理論に對して段階論の規定をあげるものではあるまいか。そして、それは勿論、単に經濟政策論などで尽しえられるものではなく、經濟学的にも、法律学的にも、また政治学的にも、究明せられるべき広汎なる研究分野をなす具体的な現実なのではあるが、しかしそのことは二十世紀の初めにあたる歴史的「具體的時代としての、金融資本の時代の純經濟的条件についてかたる」ことを——もちろんカウツキー——のいうような意味ではないが——妨げるものではないのである。原理論と段階論とを區別しないところに、むしろ帝國主義的が政治論に解消される危険さもあるといえるであろう。〉

ここで宇野氏もまた「金融資本の時代の純經濟的条件」についてかたろうとするが、その内容は全く、レーニンのそれと異なる。むしろ帝國主義を金融資本の經濟政策と解する点で本質的にカウツキーと異なるところはない。むしろ方法的にカウツキーの混乱を救いあげようとするものであるにすぎない。

(三) レーニンの文章にもどらう。「純粹の抽象」を排して、「二十世紀の初めにあたる歴史的「具體的時代としての金融資本の時代の「純經濟的」諸条件」についてかたるといふのは、どのようなことを意味するのであるうか。あるいは「現代の世界經濟の具體的「經濟的現実を對置する」といふのは、どういうことになるのであろうか。そこで、レーニンが、「純粹の抽象」としての超帝國主義を、〈超帝國主義〉という「死んだ抽象」といいかえ、かつそれが、「もつぱら、現存する諸矛盾の根底から人々の注意をそら」すもの、「金融資本の支配が世界經濟の内部の不均等性と矛盾とを弱める」といふ、實際とはまるで逆の「思想」をもたらず、といっていることに注目しよう。なぜそのようなのか。これらの点をつぎに考察する。



三

- (一) レーニンによれば、「帝國主義は、資本主義一般の基本的諸特質の発展およびその直接の継続として生じた」。資本主義の基本的諸特質は「自由競争」に集約され、自由競争は独占を生む。この独占は、単に個々の生産部門で形成される独占だけでなく、産業資本が銀行資本と融合することによって、あらゆる生産部門や流通部門に対して独占的支配を要求し、全経済分野にわたって、少数の金融資本による寡頭支配をつくらす金融資本的独占をも意味する。また、国際的には商品輸出市場の独占だけでなく、資本輸出市場の独占が決定的意味をもつこともある。さらに、独占資本家の国際的結合としての国際的独占団体が形成され、また、原料市場・商品市場・資本市場としての世界領土の独占的支配のための分割が完了し、再分割のための闘争、真の世界的独占のための闘争にまですすむ、そういう独占の高度の発展をも意味する。「帝國主義とは、独占体と金融資本との支配が確立して、資本の輸出が顕著な重要性を獲得し、国際トラストによる世界の分割がはじまり、最強の資本主義諸国によるいっさいの領土の分割が完了した、そういう発展段階の資本主義である」。そこで、問題は、自由競争から生じ、その反対物たる独占は、何故にここまですすまねばならないか、それが、資本主義一般の基本的諸特質の直接の発展・継続たる意味はどこにあるかというところである。
- (二) 歴史的に見れば、十九世紀の前半イギリスにおいては資本主義的機械制大工業の普及を基礎として、すでに資本主義が確立し、ついで後半にはいって、フランス・ドイツ・アメリカが相継いで産業革命を通り抜けて、急速な資本

主義的發展をなしとげ、いわゆる自由競争の黄金時代をもたらすのであるが、それは同時に資本主義一般の諸矛盾を成熟させ、同一産業部門内の諸資本の競争、異部門間の競争のみならず、国際的規模での諸資本の競争もまたはげしくなった。これらの競争は個別的な資本制生産に内在する諸矛盾を部門内でも部門外でもたがい結びあわせ、一国資本主義の諸矛盾を他国のそれと結びつけ不可分離のものとした。こうして世界的に結びあわされた諸矛盾は、世界恐慌として周期的に爆發するようになった。一部門の恐慌はたちまち他部門に波及し、一国の恐慌は他国に波及し、相互に矛盾をはげしくし、恐慌を深刻なものにした。これが十九世紀後半世界的に拡大し発達をとげた「自由競争」の内容であり、かかる諸矛盾を生みだす自由競争のなかで、個々の資本は、自己の生存のために不断の、必死の努力を強制されたのである。その基本的武器は、資本の蓄積を他よりも一層急速におこなうことであり、資本と生産の集積・集中によって、蓄積を加速化することであった。こうして、十九世紀七十年代以降、自由競争のなかから、独占が生れるのである。

これらのことから明らかのように、独占を生みだす生産の集積と集中は、単なる集積・集中一般ではなく、このような機械制大工業の普及・發展を基礎として世界的規模にまで成熟をとげた資本主義的諸矛盾のただなかで、諸資本の「自由競争」―生きんがために強制される競争に勝ち抜くためにおこなわれたものであり、この歴史的条件を本質的なものとしてふくんでおこなわれる集積・集中であり、独占である。すなわち、資本主義の諸矛盾の特定の發展段階におけるそれであり、そのようなものとして、はじめて必然的な・法則的な意義をもちうるのである。それ以前に偶然的に形成された生産の集積・集中、独占とは根本的に異なる。後者の場合は、個別的にはそれらがどのように巨大なものであっても、世界資本主義の一發展段階を画するまでに成長することはできない。しかし、前者の場合には、

世界的規模に成熟した資本主義の諸矛盾という歴史的条件によって、独占は自由競争にかわって資本主義の基本的特質をなすところまで不可避的に成長せざるをえない。それは、七十年代以後において個々の部門・個々の国をとってみれば、独占の形成がいかに偶然にみえようとも、右にのべたような歴史的条件によって必然性に成長・転化せざるをえないところの偶然であり、単なる偶然そのものではない。また、そこに単に一国だけでなく、世界的規模における独占にまで成長せざるをえない必然性があつたのである。

(三) 論理的には、このことは、次のようにいえるであらう。マルクスは、周知のように、『資本論』第一巻において、資本の直接的生産過程を分析するに先立ち、商品および貨幣の分析をおこなつた。これは、商品生産および商品流通の広汎な存在は、資本制生産の論理的・歴史的前提であるからである。別のいい方をすれば、資本の貨幣形態・商品形態は、資本の最初の現象形態であるからである。そしてこの形態のなかに、すでに価値通りに交換される商品および貨幣の本性と、価値を生む価値という資本一般の性質との矛盾があらわになり、この矛盾の解決のために資本の生産過程の分析にすまねばならなかつたのである。しかし、商品・貨幣の流通そのものにふくまれている矛盾、単なる商品・貨幣の流通と資本のあいだの矛盾は、資本制生産の結果として、より一層複雑な諸性質をもって再生産される。しかも、これらの資本制生産の結果は、ふたたび資本制生産の前提としてあらわれざるをえない。こうして生産を媒介として結果が前提となり、前提が結果となる循環がくりかえされる。『資本論』は、こうした循環過程の反覆のなかで発展する資本主義経済の諸矛盾を資本の生産過程・流通過程・総過程へと順次上向することによって、全体として明らかにしたものにほかならない。

このように、資本制生産の循環運動の分析を通じてしめされる諸矛盾の多様な展開は、『資本論』をこえて、マル

クスの経済学大綱プランの最終項「世界市場と世界恐慌」にまですすめられるのであるが、これまた資本の前提たる商品・貨幣の一般性・世界性の具体的展開であり、歴史的には、資本の近代的生活史の前提としての世界商業および世界市場の一層発展した再生産にはかならない。いまや、周期的に資本主義世界の全機構を根底からゆりうごかす世界恐慌の危機を内包するところの、世界商業・世界市場としてあらわれるのである。

しかるに、これは、「資本主義一般の基本的諸特質」の全面的展開にほかならないが、同時に資本主義一般の——偶然性をとりのぞいた——歴史的發展の成果である。論理的展開は歴史的發展を前提し内包するのであって、後者なしには前者は論理の空転でしかありえない。日々におこなわれる資本の運動が、論理必然的に世界市場・世界恐慌として、その基本的諸特質を展開せしめるのは、十九世紀中葉にいたる資本主義發展の歴史的成果を前提としてのことである。いまや、自らの前提を自己の活動の結果として生みだし、その成果を自己の活動の前提としてふたたび措定するところの、自らの前提を自らつくりだしつつ進行するところの、資本の絶対的な自律的な自己運動が確立するのである。しかし、同時にその絶対性は実は外観にすぎない。すなわち、その本源的な歴史的な前提の法則性が明らかにされなければ、単なる相対的自律性にとどまらざるをえない。このことは、資本の自己運動の法則性は、より根本的な人類社会の歴史的な発展法則に結びつけなければ、強固なものとなりえないことを意味する。逆説的にいえば、人類社会の歴史的な発展法則との関連においては資本の運動は——相対的な過渡的な運動にすぎない、ことを明らかにすることによってのみ、資本の論理——したがってそれは、いまや資本主義の生成・発展・消滅の法則にほかならないが——の絶対的真理性が保証されるのである。これが、論理的なものとの歴史的なものとの本源的な一致であり、論理的なものを、肯定的なものうちに否定的なものを見出す弁証法的論理として把握することである。

あり、資本の本質をより深く認識することにほかならない。別言すれば、経済学を科学としての唯物史観のもっとも基礎的な・一部門として位置づけることである。レーニンの『帝國主義論』の終章『帝國主義の歴史的地位』は、単に資本主義の特殊な段階としての帝國主義だけでなく、資本主義一般の歴史的地位を、そのような関連のなかで一層具体的に、現代資本主義の諸条件をふまえて位置づけたものにほかならない。

しかし、論理的なものと歴史的なものとの一致は、このような本源的一致にとどまらない。資本主義的生産様式の範圍内において、すなわち、根源的には相対的なものにすぎない資本の運動が、あたかも絶対的・自律的な運動としての外観をたもちつつ展開されうる範圍内においても、両者の一致なしには、論理の展開そのものが空疎なものとなる。いふなれば、かの根源的一致は資本の自律的運動の内部にまで浸透しなければならない。単純なものから複雑なものへ上向する一步一步において、個々の経済的カテゴリーが歴史的に特殊なものとして限定されることによつてのみ、総体としての資本主義社会の歴史性もまた完全に明らかにされる——経済学の窮極の目的——からである。もちろん、論理的順序が現実の歴史的発展の時間的順序と直接一致しなければならないというのではない。資本主義生産様式の内的組織を明らかにするために必要な論理的順序——抽象から具体へ、単純なものから複雑なものへ——に依つて、展開されねばならない。何故なら認識の出発点は具体的現実であり、そこから下向し更に上向して具体的現実を思维のなかに再構成する認識の円環運動的性質——これは資本主義社会の運動の一面をなす循環的運動の反映にほかならないが——によつて規定されるからである。しかし、認識の深化は、「資本主義一般の基本的諸特質」——経済学のカテゴリーに定着される——の弁証法的性格・歴史性を明らかにすることによつて、資本の運動の循環的性格の一面性を暴露し、円環的循環の外に出発点があり、循環の終局点において円環を突破する、いわゆる螺旋的運動をえ

かくものとして把握するにいたるのであるが、これは諸カテゴリーを抽象的なもの・単純なものから具体的なもの・複雑なものに展開する一步一步において、個々にその歴史性を明確にしてゆくことによって、全面的に思惟のなかに再構成されるのである。かくて、認識の円環的性格は、単なる一時的なしかし、必要な・さげがたいところの外観・形式となる。認識はこのような円環運動を通じて一步步々、螺旋的に展開されるのである。

(四) ここに、マルタスの『資本論』が「資本主義一般の基本的特徴」——資本主義経済の内的組成——を明らかにすることに、資本主義の歴史的發展法則をも明かにしえている所以があるのであるが、他方では、資本主義の発展とともに資本主義経済の一般理論が一層その具体的内容を豊富にしなければならぬわけがあるのである。マルクスが、『資本論』において独占以前の資本主義しかとりあつかっていないのは、彼が生きた時代の制約以外のなものでもない。歴史的諸条件の変化・発展とともに、自らの延長線上に一層具体的な資本主義の理論を展開しようような構造を『資本論』はもっているのである。レーニンの『帝国主義』論はまさにそのような延長上の作品にすぎない。資本主義の発展そのものによって変化せしめられるところの資本の運動の歴史的条件的変化と、それによって形成される特殊性を反映するかぎり、『帝国主義』論は独占資本主義という特殊段階の理論であるが、またそれに対応して『資本論』を産業資本主義段階の特殊理論といえないこともないが、むしろ、これらの特殊段階が——初期資本主義をふくめて——資本の論理的・歴史的運動の必然的結果として、資本の一般的運動法則の内容を構成するのである。かかる歴史的制約性を自己の本質的内容としてふくむことよってのみ、一般性は無内容な空語ではなくなり、豊富な具体性を展開せしめるのである。レーニンは、さきに引用した一句によって、帝国主義を、そしてまた『帝国主義』論をそのようなものとして位置づけたのである。

〔註〕レーニンは、『資本論』と『帝國主義』論の内的連関を次のようにも述べている。(『帝國主義』論 第一章 全集 二二九一)

「半世紀まえにマルクスが『資本論』を書いたときには、自由競争は、圧倒的多数の経済学者にとつて「自然法則」のように見えた。マルクスは、資本主義の理論的および歴史的分析によつて、自由競争は生産の集積を生みだし、この集積はその發展の一定段階では独占に導くということを証明したが、官学はこのマルクスの著書を黙殺という手段によつて葬りさうと試みた。だが、いまや独占は事実となった。経済学者たちは山なす書物を書いて、独占の個々の現れについて記述しながらも、口をそろえて、「マルクス主義は論破された」と言明しつづけている。だがイギリスのことわざにもいうとおり、事實はまげられないものであつて、いやでもおもうでもそれを考慮に入れなければならぬ。事實のしめすところによれば、たとえば、保護貿易か自由貿易かという点で個々の資本主義國の相違は、独占の形態あるいはその發生時期における本質的でない相違をもたらす条件をなすにすぎないのであつて、生産の集積による独占の發生は、總じて資本主義の現在の發展段階の一般的な法則なのである。」

宇野氏は「マルクス主義は論破された」というかわりに、『資本論』は「純化されねばならない」とし、その「純化」によつて「不純な」帝國主義段階とのつながりを断ちきつたのちに、『資本論』を「原理論」として首尾よく神棚にまつりあげてしまつてはいないだろうか。それは、独占資本主義あるいは前國主義が資本主義あるいは帝國主義の現在の發展段階の一般的・根本的法則であることをどこまでも拒否し、「本質的でない相違をもたらす条件にすぎないもの」をいわゆる「段階論」の基軸にすえるためのものであつた。

#### 四

(一) レーニンは、『帝國主義』論の第一章「生産の集積と独占体」において、十九世紀末・二十世紀初頭における生産の集積と独占形成の過程をのべたのちに、「新しい資本主義が古い資本主義に最後のにとつてかわつた時期」を「二十世紀の初め」であると断定し、「独占体の歴史を基本的に総括する」にあつて、世界恐慌と関連せしめつつ、つぎのようにいつている。

「(一)一八六〇年と一八七〇年代——自由競争の最高の極限の發展段階。独占体はほとんど目だたないくらいに萌

芽にすぎない。(一)一八七三年の恐慌以後。カルテルは広汎に発展したが、なおそれは例外にすぎない。それはまだ強固でなく、まだ経過的な現象にすぎない。(二)十九世紀末の好景氣と一九〇〇—一九〇三年の恐慌。カルテルは全經濟生活の基礎の一つとなる。資本主義は帝國主義に強化した。」

ここに明らかなことは、産業資本主義がその發展の極点において生みだした世界恐慌、資本主義的諸矛盾の總体的爆發という歴史的条件——それはマルクスの「經濟学プラン」の帰結をなすものでもあった——のなかでのみ、生産の集積が独占をもたらすことを、論理的・歴史的にしめされていることである。

さらに、レーニンは、このような諸条件のなかで生みだされた独占が、どのような新たな矛盾をもたらすかを、のべている。帝國主義段階において、資本主義は「生産の全面的な社会化にびったりと接近する」とともに、取得の私的性格を一層はげしくする。すなわち、資本主義の基本矛盾が一層激化することをのべているのであるが、単にそれが量的にそうだけというだけでなく、一つの質的に新たな対立を生みだすことを示めている。独占資本と非独占資本との闘争は、大企業と小企業とが、あるいは技術的におくれた企業と技術的にすんだ企業との自由競争——この競争のなかでは、今日の小企業が明日の大企業となり、今日の技術的におくれた企業が明日の技術的にすんだ企業となる可能性がなお広汎に残されている——とこととなり、独占資本によるその他の資本に対する支配、圧殺をもたらす。非独占資本にとって自由は圧殺され、競争ではなく、従属が強制されるのである。

また、独占化は、さらに恐慌を激化し、恐慌は独占化を飛躍的に促進する。独占と恐慌に関連してレーニンがつぎのようにいっていることは、独占の下での恐慌の一樣相を示唆して興味ぶかい。

「カルテルによる恐慌の排除ということは、ぜがひでも資本主義を美化しようとするブルジョア經濟学者のおと



ぎ話である。いくつかの工業部門で形成されつつある独占は、総体としての全資本主義的生産に固有の混沌状態をつよめ激化させている。資本主義一般にとって特徴的な、農業と工業との発展の不均衡は、ますます大きくなっている。カルテル化のもっともすすんでいるいわゆる重工業、とくに石炭業と鉄工業のおかれている特権的地位が、その他の産業部門でへ計画性のますますはなはだしい欠如に導かれている……」

〔註〕これは、今日、独占資本主義のもとでは、恐慌の犠牲が強力的に弱小資本にしろよせされる現象として、誰しも認めているところであるが、注意すべきは、「重工業の……特権的地位」という指摘である。一般に独占資本はこのような特権的地位を享受してきたが、そのなかでも特にどの産業部門がそのような地位をえるかは、それぞれの時期あるいは国の資本主義発展の諸条件——危機の深化の性格と度合といった方がよいかも知れない——によって移動する。ある場合には軍需産業であったり、ある場合にはエネルギー産業であったりする。

(二) とところで、独占は単に経済恐慌を激化し、それに新たな様相をつけくわえるだけではない。独占資本による世界の再分割のための闘争は帝國主義的世界戦争の危機を生みだす。これは周期的な全般的過剰生産恐慌とは異なる「恐慌」(危機)であり、帝國主義段階に固有の世界的危機である。この種の危機はすでに人類に未曾有の犠牲を強いたが、独占資本は国民経済の荒廃のなかで肥えふとった。「恐慌——あらゆる種類の恐慌のこと、経済恐慌がもっとも多いが、たんに経済恐慌にかぎらない——は、それはそれで、集積と独占への傾向を大々的に強めたのである。経済恐慌は独占によって一層激化せしめられるとはいえ、独占資本主義が前段階からひき継いだ資本主義的諸矛盾の集中的爆発の一形態であった。しかし、世界戦争という危機、恐慌は、独占資本主義が自らの内在的矛盾の発展の結果としてつくりだした、独自のものである。いわば、いくたの経済恐慌に促進されながら、成長した独占は矛盾の独自の爆発形態を成熟せしめたのである。そしてこの危機はまた、一層独占的集中化を促したのであるが、単にそれだけでなく、私的独占資本主義から国家独占資本主義への転化を促した。もちろんこの転化に経済恐慌——たとえば

一九三〇年恐慌——も一定の役割を果たしたが、やはり決定的なものは帝国主義的世界戦争という危機であった。

この危機は、反面、一国における社会主義革命を可能ならしめるような諸条件でもあるわけであり、また実際に社会主義同盟を成立せしめ、さらに資本主義世界体制に対立し、かつすでにこれを圧倒する力をもった社会主義世界体制を成立せしめたのであって、いわゆる資本主義の全般的危機の深化を意味するのであるが、そのような危機が国家独占資本主義への転化を促したのである。この意味では資本主義の全般的危機という歴史的条件は、独占資本主義自身が生みだした結果であり、その結果を自らの国家独占資本主義への転化の前提たらしめたにほかならないのであって、それ自身独占資本主義に内在する矛盾の自己運動の本質的特徴を形成するものである。それはもはや単なる外的な歴史的条件ではない。独占資本の矛盾が生み出した結果が前提となったものであり、しかも、それが不可欠の前提として、独占資本の運動を規定し、かつ後者に媒介されて、ふたたび結果として拡大再生産されざるをえないのである。かくて、独占資本主義の全運動をみれば、そのような「歴史的条件」は運動の内在的契機をなすものにほかならない。内的対立が外的対立に転化し、その外的対立を媒介にしてより高次の運動に飛躍することは、矛盾の一般の運動形態にほかならず、その全運動過程に内在する本質的モメントにほかならないのである。

(四) このようにみてくれば、レーニンが、さきに、「二十世紀の初めにあたる歴史的『具体的時代としての金融資本の時代の（純経済的条件）について」かたり、また「現代の世界経済の具体的『経済的現実』を対置すべし」ところの、具体的条件なるものの意味が明らかであろう。また、カウツキーの「純経済見地」がなぜ「純粋な抽象」であり、また「死んだ抽象」であるかが明らかであろう。

歴史的条件を捨象した矛盾の自己展開は所詮は真空中のトンビがえりにすぎない。それはレーニンのいうように

「完全に無内容」である。それは歴史的現実とのつながりを欠くが故に、生きた現実を反映することができず、したがって「死んだ抽象」にすぎない。歴史的諸条件を考慮するということは、「現存する諸矛盾の根底に」注意を集中することであり、それを自己の本質的内容として展開される矛盾の運動の特質を把握することではなくてはならない。その意味で経済法則も条件的であり、歴史的なのである。たとえば、宇野氏がいうように経済法則と歴史的條件は単なる外的対立であり、後者が前者の純粹な自己運動を弱めるといったものではない。宇野氏にあっては、内的に対立するものがその統一の外觀を破って外的対立→闘争に転化し、その外的対立→闘争を通じて、發展する矛盾の運動の弁証法がない。したがって量から質への転化も、否定の否定も法則として正しく把握できない。総じて弁証法がかけられているのである。「原理論」では統一にしがみつき、「段階論」では外的対立しかみることができない機械論、現象の表面をあれこれとまわし、そのまま肯定し、方法論的に固定化してしまうところに、宇野氏の「経済学方法論」の特徴がある。それは、カウツキーの方法論と瓜二つである。

(四) このようなカウツキー的「純粹な抽象」「死せる抽象」は、今井則義氏や井汲卓一氏によって展開された「国家独占資本主義論」にもあらわれている。氏らの所謂「生産関係社会化」論は資本主義の全般的危機という歴史的條件を単なる外的条件としうえて、「独占と国家の癒着」という規定を抽象的だとし、内的契機を生産力の發展にともなう生産関係の社会化にみているのであるが、すでにみたように、資本主義の全般的危機は、独占資本主義の矛盾の展開の結果であり、同時に、矛盾——基本的矛盾——の運動を内的に規定する。その新しい独自の形態が、独占と国家の癒着ということである。もとより、独占と国家の癒着の本質は、私的独占による独占利潤の国家的収奪にほかならないが、しかし、このような規定もお形式的規定たるを脱れない。なぜなら、全般的危機のもとで私的独占によ

る独占利潤の追求が危機にさらされることこそ、彼等を国家権力との全面的癒着にかりたてるのであって、これによつてもたらされる矛盾の深さ、その深さを規定する諸契機——全般危機の基本的諸矛盾——が、「国家的収奪」や「癒着」の内容を根底から規定し、国家独占資本主義を現代資本主義の支配的傾向たらしめているのである。このように資本主義の全般的危機は国家独占資本主義の外的条件であるが、それは独占資本主義そのもの生みだした結果であり、独占資本主義がその運動の前提として背負わねばならない条件であり、したがって、それはふたたび独占資本主義の運動を内容的に規定し、それに独自の・時代的特質を刻印するのである。つまり、全般的危機を国家独占資本主義の外的条件とみなすことが間違ひではなく、いつまでもそこにとどめておき、それなしには独占資本の運動が不可能であるのみならず、その運動の独自性を規定する決定的契機に転化することを認めない点にある。基本矛盾一般、生産の社会化一般、独占利潤一般は基本的ではあるが、あまりにも一般的契機にすぎない。したがって、これらを歴史的に独自の契機から切斷して、それだけから国家独占資本主義の本質を規定しようとするれば、カウツキーと同じ「純粹な抽象」たるをまねがれないのである。

しかし、かかる「抽象」から国家独占資本主義を説明することが誤りだということから、宇野氏の「段階論」の領域に国家独占資本主義論をひきつりこむならば、誤りを二重化し、極端まで押しすすめることになるであろう。その法則的必然の説明を断念することによつて自らを救おうとするにすぎない。それによつてひそかに、国家独占資本主義を独占資本の政策として説明することに道をひらこうとするのであれば、もはや何をかいわんやである。今井・井汲理論の混乱を宇野氏的方法によつて救おうとするのは、「反動的目的に役立」てるための総仕上げにすぎない。

本稿ではレーニンの段階規定の意味を明らかにするだけに終った。なお論すべき点を多くのこしているが、一応ここで擲筆する。